

『山椒大夫』

炉の向側には茵むかいがわ三枚をしとね重ねて敷いて、山椒大夫がすわっている。大夫の赤顔が、座の右左に焚たいてある炬火たてあかしを照り反かえして、燃えるようである。三郎は炭火の中から、赤く焼けている火筋ひばしを抜き出す。それを手に持つて、暫く見ている。初め透き通るよ
うに赤くなっていた鉄が、次第に黒ずんで来る。そこで三郎は安寿を引き寄せて、火筋
を顔に当てようとする。厨子王はその肘ひじに絡み附く。三郎はそれを蹴倒けたおして右の
膝ひざに敷く。とうとう火筋を安寿の額に十文字に当てる。安寿の悲鳴が一座の沈黙を
破つて響き渡る。三郎は安寿を衝つき放して、膝の下厨子王を引き起し、その額にも
火筋を十文字に当てる。新あらたに響く厨子王の泣声なみごゑが、稍微ややかになった姉の声に交る。
三郎は火筋を棄てて、初め二人をこの広間へ連れて来た時のように、又二人の手を摑はし
まえる。そして一座を見渡した後、広い母屋おもやを廻めぐつて、二人を三段の階はしの所まで引
き出し、凍った土の上に衝き落す。二人の子供は創きずの痛いたみと心の恐おそれとに氣を失いそう
になるのを、ようよう堪え忍んで、どこをどう歩いたともなく、三の木戸の小家こやに帰
る。臥所ふしどの上に倒れた二人は、暫く死骸しがいのように動かずにいたが、忽ち厨子王が
「姉えさん、早くお地藏様を」と叫んだ。安寿はすぐに起き直つて、肌まもりの守袋ぶくろを取り
出した。わななく手に紐ひもを解いて、袋から出した仏像を枕元に据えた。